

心理学と考古学をつなぎあわせる

— 認知考古学の試み

徳山大学福祉情報学部人間コミュニケーション学科 准教授

時津裕子（ときつ ゆうこ）

Profile — 時津裕子

1997年、九州大学文学部史学科卒業。2001年、九州大学大学院人間環境学研究所行動システム専攻修士課程修了。2004年、同博士後期課程単位取得退学。博士（人間環境学）。2011年より現職。専門は認知心理学、認知考古学。著書は『鑑識眼の科学』（単著、青木書店）など。



「ご専門は？」と尋ねられたとき、私はまず「心理学です」と答え、「それから考古学です」と付け加えるようにしています。すると大抵、相手から「えっ!？」と驚きの声があがります。日本においては、研究者の専門が複数領域にわたることはまだあまり一般的ではないと思いますし、さらに心理学と考古学の間には一見して接点らしいものがないため、私の答えは一層変わって聞こえるのかもしれませんが。私が研究活動に取り入れてきた、この「心理学+考古学」というスタイルを表現するには、実は「認知考古学」という便利な名称もあるのですが、知名度が低くほとんど役には立たないのが現状です。そこで冒頭で述べたような答え方をすることになるのです。

心理学と考古学の接点？

しかし、そもそも心理学がいったいどのように考古学とつながりを持つのでしょうか。どちらも人間に関わる学問とはいえ、聞き手に二つの領域の隔たりを感じさせる最大のポイントは、方法論の違いであるかもしれません。心理学では、現在に生きる人間を相手に観察や実験を通じて考えていきますが、一方、考古学では、大昔に生きていた人間に直接対峙することにはできません。地面を掘り返すという大変な苦勞の末に手に入るのは、せいぜい土器や人骨、

建物の柱（の穴）といった、人間の営みのわずかな痕跡にすぎないのです。考古学者が人間について語るにはまず、こうした物証を通じて過去に何が起きたのか、人間の行動を丹念に復元するプロセスが必要となります。考古学がしばしば犯罪捜査に擬えられるゆえんです。

こうした考古学的方法論の特殊性にばかり目がゆきがちですが、重要なのは、地面を掘り返しながら考古学者も、その先にやはり「人間」の姿を追いかけているという点です。過去の人びとはどのように感じ、考え、行動したのか。文化によって異なるのはどんなことか（文化を超えて共有されるのはどんなことか）。何百万年も前に暮らした初期人類から現代まで、人間はどのように変わってきたのか（あるいは変わらずにいたのか）、そういうことが知りたいのです。それらを踏まえてみると、心理学と考古学とは、方法論こそ異なるかもしれませんが、研究の目的や目指すべき到達点は、共通する部分が大きいに思えるのですが、いかがでしょうか？

私の学問上の経歴は考古学徒としてスタートしています。学部時代を考古学科で過ごし、発掘調査などのフィールドワークと、そこから持ち帰った資料の整理・分析とに長い時間を費やしました。そ

の甲斐あって、業績リストの最初の数本は、考古学系雑誌に投稿した、墳墓に関する論文で占められています。そのような私ですが、考古資料の分析を通じて理解しようとしていたのは、やはり人間なのです。過去の人びとの概念や価値観、コミュニケーション、社会戦略などが中心テーマでした。

それらを追究するなかで徐々に、心理学が積み重ねた知見に目が向いたのは自然な流れだったといえるでしょう。心理学が解明してきた、人類に普遍的な認知のメカニズム・思考のパターンと、経験を通じて社会・文化的に培われる特性、個人差等々。これらの「基本」を知らずにいて、人間行動の復元などという難問に立ち向かえるのでしょうか。

こうした気づきこそが、私が心理学の世界に足を踏み入れるきっかけとなりました。どうせ学ぶのなら本格的にと考えた私は、大学院に進学する際、専攻を考古学から心理学へ切り替えました。その頃まだ、公式に double major を認める受け皿が周囲になかったからです（ただ結局、そうやって「留学」した先が想像以上に魅力的な世界であったために、考古学界に「帰国」することなく現在へと至るのですが、それはまた別の話です……）。

認知科学としての考古学

上で述べたような、考古学者の心理学（あるいは認知科学）に対する注目は、私個人の中だけで起きていたことではありません。認知科学（主として認知心理学）の理論と手法を考古学に取り入れようとする新たな研究パラダイム、すなわち「認知考古学」の波が、1980年代の欧米での発生から十数年を経て、ここ日本でも高まりつつあったのです。認知考古学の具体的な取り組み内容、詳細な成立経緯については関連書籍をご覧ください（e.g. 松本他, 2003；Renfrew & Zubrow, 1994；時津, 印刷中）

さて、こうした考古学界での動向は、認知科学サイドにはどう受け取られてきたのでしょうか。ガードナー（Gardner, 1985）が著書『認知革命』で掲げた「認知諸科学」には、残念ながら考古学はまだ仲間入りできていません。しかし90年代の終わり頃から、認知科学事典等にも取り上げられはじめます。独特な方法論を用い、人間の認知・行動に関する貴重なデータを数百万年前～現代という超長期的スパンで提供できる唯一の領域、それが考古学です。心理学に多くを借り受け、いわばその後を追う形でスタートした認知考古学ですが、徐々に認知科学の中でも地位を確立しつつあるといえます。

「考古学」にメスを入れる

心理学の世界に足を踏み入れた私が最初に選んだ研究テーマは、考古学者の認知技能「鑑識眼」研究でした。熟練した考古学者は、小さな土器片であっても一目で正確に分類（同定）し、長期にわたって記憶するなど、人工物の認知に卓越したパフォーマンスを発揮します。なぜそのようなことが可

能なのか、これは考古学徒時代の私が常々疑問に感じてきたことでした。眼球運動の測定や記憶課題を通じて、彼らの認知特性と思考・判断（情報処理）のメカニズムを明らかにしようと熱中しました（時津, 2007）。より実的な場面での検討を求めて、遺跡で眼球運動を測定したこともあります。発掘調査活動中の視線と問題解決がテーマでした。

これらの研究活動は心理学であると同時に、実はそのまま「認知考古学」であるということもできます。認知考古学の研究対象に、研究主体の認知を含めることは早い段階から主張されてきました（Renfrew & Zubrow, 1994）。これらはいわば、研究主体の認知にメスを入れ、考古学という営み自体を問い直す、メタ考古学的試みです。私の活動は、心理学界では当初から好意的に受け止められていたように思いますが、考古学界ではすぐに理解を得られたわけではありませんでした。熟練者の中には、自らの技能を「試される」ことへ不快感を示す方がいましたし、明確な反発を受けなくとも、物好きな研究だというような評価にとどまることが多かったように思います。風向きが大きく変わったのは、2000年のことでした。世間に強い衝撃を与えた旧石器捏造事件を境として、私の仕事に対する考古学者からの評価も、急速に高まっていったと記憶しています。

これから

私の現在の関心は、鑑識眼研究についていえば、熟練考古学者の認知特性を把握することから、そのような特性を早く確実に体得するための学習法（および教育指導法）を確立することへとシフトしつつあります。研究の出発点とな

ったのは、先にも述べたように、熟達者のパフォーマンスに対する素朴な疑問でしたが、それは私自身が過去に、なかなか技能を獲得できずに苦労したという経験に基づくものです。誰もが早く効率的に鑑識技能を得られる学習法の確立とは、当時の私自身のニーズであったと同時に、おそらくは現在の若い考古学専攻生たちの抱えるニーズでもあるのです。まずはこれらに応えたいと思っています。

あわせて、最近はまだ少し欲張りにもなりつつあります。鑑識技能を必要とする領域は、考古学に限られません。医学における画像診断、生物学における種同定ほか、多数の領域で同様のニーズがあると考えられます。考古学が扱う資料バリエーションの豊富さ、幅広さを考えると、私がこれまで進めてきた鑑識眼研究の成果は、考古学の枠を越えてもっと多様な領域に適用・貢献できるのではないかと思うのです。そういうことができれば、私自身がこれまで考古学と心理学からもらい受けてきたものを、少しでも返していけるのかなという気がしています。

文 献

- Gardner, H. (1985) *The mind's new science: A history of the cognitive revolution*. New York: Basic Books.
- 松本直子・中園聡・時津裕子（編）（2003）『認知考古学とは何か』青木書店
- Renfrew, C. & Zubrow, E. (Eds.) (1994) *The ancient mind: Elements of cognitive archaeology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 時津裕子（2007）『鑑識眼の科学：認知心理学的アプローチによる考古学者の技能研究』青木書店
- 時津裕子（印刷中）「認知考古学」箱田裕司・行場二郎（編）『認知心理学ハンドブック』有斐閣